

パンズ・ラビリンス

2007(平成19)年8月27日鑑賞(角川映画試写室)

★★★



監督・脚本・プロデューサー＝ギレルモ・デル・トロ／出演＝セルジ・ロベス／イバナ・バケロ／アリアドナ・ヒル／マリベル・ベルドゥ／ダグ・ジョーンズ／アレックス・アングロ／ロジャー・カサメジャー／フレデリコ・ルピ／マヌエル・ソロ (CKエンタテインメント配給／2006年スペイン、メキシコ映画／119分)

……ナチスドイツと手を組んだフランコ將軍による、レジスタンス派への弾圧という厳しい現実の中、少女オフェリアには魔法の国からのお誘いが……。夢の世界は、厳しい現実と対比されるとより美しく……。撮影賞、美術賞、メイクアップ賞を受賞した美しい映像は、たしかに見モノ。しかし、団塊世代の私には、もっと現実の世界を描いてほしかったという思いも……。さて、若いあなたは……？

スペイン内戦のお勉強を！

日本人は、良くも悪くも第2次世界大戦当時に「日独伊三国同盟」を結んだドイツ・イタリアのことはある程度知っているが、スペイン内戦やフランコ独裁政権のことは、ほとんど知らない人が多いはず。これは、中学や高校の歴史でもほとんど教わらないし、文学作品を読んだり、映画で観る機会も少ないため……？

私知っている範囲内では、多分スペイン内戦を背景とした最も有名な映画は『誰が為に鐘は鳴る』(43年)だろう。スペイン共和国政府に対して、軍事反乱を起こしたフランコ將軍はナチスドイツと手を結び、共和国政府を支持する共和派やレジスタンス派に対して、徹底的な弾圧を加え続けた。そしてこの映画の時代は1944年のスペイン。

ナチスドイツがポーランドへ電撃侵攻を開始したのは1939年9月1日だが、その5年後の1944年6月には連合国軍がノルマンディー上陸作戦を開始したため、ナチスドイツの敗北はもはや明らかになっていた。その時、スペインの山の奥にこもって

フランコ政権への抵抗を続けるゲリラ軍は……？

この映画のプレスシートには、法政大学教授川成洋氏の「スペイン内戦とフランコ政権」という解説があるので、これを読み、スペイン内戦という時代背景をしっかりと勉強した上で、少女オフエリア（イバナ・バケロ）のファンタジーへの憧れを理解したいものだ。

キーワードはパン、ラビリンス、そして妖精

チラシを読んで私は、一瞬この映画はスペイン内戦を描いた重々しいものかと思ったが、第79回アカデミー賞で撮影賞、美術賞、メイクアップ賞の3部門を受賞したことや、「だから少女は幻想の国で、永遠の幸せを探した」という謳い文句を読み、またチラシの写真を見ていると、どうもこれはファンタジー映画のよう……？

他方、この映画のタイトル、パンズ・ラビリンスとは、牧神（パン）のラビリンス（迷宮）という意味。ギリシャ神話において、羊飼いと羊の群れを監視する神として登場するパン（牧神）は、ヨーロッパ社会ではポピュラーな存在。したがってドビュッシーの管弦楽曲『牧神の午後への前奏曲』など音楽に登場してくる事も多い。しかし日本ではパン（牧神）はなじみが薄いもの。

他方、ラビリンス（迷宮）は迷宮入りと言う言葉が定着しているように、かなり一般的な日本語になっている。ギリシャ神話に登場するのは、世界最古のものと思われるクレタ島のクノッソスの迷宮。このように、パンズ・ラビリンスはヨーロッパ社会においてはきわめて一般的な用語だが、日本では……？

なお、オフエリアがパンと出会いラビリンスに導かれていく発端は、妖精との出会いだが、妖精は日本でもポピュラーなもの。

しかして、この映画のキーワードは、パンとラビリンスそして妖精の3つ。

なぜ、2人は再婚したの……？

この映画の面白いところ（？）は、スペイン内戦の深刻さと、幻想の国のファンタジー性の両者を同時に描いていること。なぜそのようにしたのかというと、童話が大好きで、夢見ることが大好きな少女オフエリアが、パンに導かれるようにプリンセスとして魔法の王国に惹かれていったのは、ある意味厳しい現実からの逃避という側面を描くため……？

この映画では、仕立屋をしていた父親の死亡後、なぜ母親のカルメン（アリアドナ・ヒル）が、フランコ軍の一部隊のボスとして、今山の中でゲリラ制圧のために戦っているビダル大尉（セルジ・ロベス）の妻となり、その駐屯地に赴いているのか全く説明されない。しかも、この時カルメンは既に臨月を迎えていたため、駐屯地のフェレイロ医師（アレックス・アングロ）からは馬車での長距離移動を禁止されていたのに……？

カルメンがビダル大尉を特に愛している様子はないから、この再婚はひょっとしてカルメンの身の安全のため……？ 他方、大尉は一応カルメンを愛しているようだが、本音は自分の子供がほしいだけ。しかも、お腹の中の子供を大尉は勝手に男の子と決めつけているが、それは一体なぜ……？

オフエリアが駐屯地の中でますます童話の世界、魔法の世界に入り込んでいったのは、そんなビダル大尉や駐屯地での生活を全然好きになれなかったためであることは明らか……。

3つの試練の第1は……？

妖精に導かれて森の中でパン（ダグ・ジョーンズ）と出会ったオフエリアは、パンから「あなたは魔法の王国のプリンセス、モアナの生まれ変わりに違いない」と告げられた。その証拠は、オフエリアの左肩にある印とのこと。そう言われたオフエリアは、この年頃の女の子らしく素直にそれを信じることに……。

そんなオフエリアに対してパンは、満月の夜が来るまでに3つの試練に耐えることができれば、王国で待つ両親の元に帰ることができると伝えた。その第1の試練は、死にかけている巨木を救い花を咲かせること。きっとオフエリアはそれがどれほど大変な試練かわまらないままチャレンジしたのだろうが、実はそれは、会食に出席するために母親が用意してくれていた美しいドレスを泥だらけにし、気味悪い巨大カエルの口から吐き出される唾液にまみれてしまうほど大きな苦勞を伴うものだった。

やっとの思いで第1の試練を突破したオフエリアに対して与えられる第2、第3の試練とは……？ 他方、そんなオフエリアの動きとは別に、ゲリラをめぐる不穏な動きも少しずつ深刻化していたが……。

ビダル大尉 vs. ゲリラの攻防戦についての疑問 その1

この映画は、オフェリアが3つの試練にチャレンジしていく魔法の国に関するおとぎ話と、ビダル大尉 vs. ゲリラの手に汗を握る攻防戦という全く異なる脈絡の2つの物語が展開していく。ギレルモ・デル・トロ監督が狙うのはもちろん前者なのだが、私はむしろ後者の方に興味がある。しかし、その攻防戦の描き方についてはいくつかの疑問が……？

ビダル大尉は任務には忠実だが、きわめて独裁的かつ冷酷な男。そんな男だから、一方では自分の息子が生まれてくることに強い期待をもっているが、ゲリラの制圧については徹底したもの。当然私はそう思ったのだが、実はこの映画が描く駐屯地でのビダル大尉の指揮ぶりを見ていると、どうも駐屯軍とゲリラの力関係がよくわからない。それが第1の疑問だ。

駐屯軍は村人たちをすべて支配し、食料の配給まで牛耳っているようだが、ここに駐屯している部隊はせいぜい100名程度。そのうえ、駐屯地の防備はそれほど厳重ではなさそう。これでは、山の中に隠れ住んでいるゲリラが隙を見計らって駐屯地を襲撃すれば、ビダル大尉の部隊はひとたまりもないのでは……？ そんな心配をしていたところ、案の定……？

ビダル大尉 vs. ゲリラの攻防戦についての疑問 その2

ビダル大尉とゲリラとの攻防戦における大きなポイントは、ビダル大尉の傍で身の回りの世話をしている女性メルセデス（マリベル・ベルドゥ）とフェレイロ医師が、実はゲリラと通じるスパイだったということ。ホントはこれは事前にバラしてはいけないネタなのだが、評論のためにはやむをえない。

スペイン国内で共和派とフランコ派に分かれて長期の攻防戦が続けられると、誰が敵で、誰が味かわからなくなるのは当然のこと。したがって、内通者、スパイには最大限の用心がなされているはずで、あれほど冷酷な独裁者であるビダル大尉が、いとも簡単にすぐ身近にスパイの存在を許すことは到底考えられないもの。したがって、その点の描き方は少し甘いのでは……？

ビダル大尉 vs. ゲリラの攻防戦についての疑問 その3

疑問点の第3は、メルセデスがスパイであることが発覚し、ビダル大尉から拷問を受けようとする直前、エプロンに隠し持っていたナイフでビダル大尉を刺したメルセデスが、なぜビダル大尉を殺してしまわないのかということ。ビダル大尉の口の中にナイフを差し入れ、口を大きく切り開くという行為に及んだメルセデスは、なぜとどめを刺すことなく逃げていったのだろうか……？ そんなことをすれば、すぐに追いかけて捕まってしまうことはミエミエ……？ これは、それまで用心深く自分を偽ってゲリラに情報を提供していたメルセデスには、ちょっと考えられない行動では……？

話は再び魔法の国へ……

こんなビダル大尉とゲリラとの攻防戦が展開された後、スクリーン上は再びオフエリアが魔法の国に戻るための、あと2つの試練の物語に移っていく。パンからオフエリアに与えられた第2の試練は、壁の向こうの世界に行き、カエルから取り戻したカギを使ってあるものを持ち帰ること。これには、制限時間を守ることと豪華な料理には何ひとつ手を出してはならない、という2つの条件が課せられていた。さて、オフエリアの第2の試練へのチャレンジは……？

この映画が第79回アカデミー賞で撮影賞、美術賞、メイクアップ賞の3部門を受賞したのは、もっぱらこのファンタジーの世界を描いた部分が評価されたため。したがって、この第2の試練とそれに続く第3の試練へのチャレンジの様子が、美しい映像の中で描かれていくことは大いに期待できるはず。そして、このようなファンタジー色豊かな美しい映像は、読むよりも観た方がいいに決まっている。

したがって、以下展開される魔法の国への復帰の物語とその美しい映像は、若干無責任なようだが、是非あなた自身の目で観ていただくことにしよう。こんな映画はきっとハッピーエンドが用意されているはず(?)だから、それを楽しみに壮絶な現実世界の厳しさをしばし忘れて、美しい映像と楽しいファンタジーの世界に浸ってみてはいかが……？

2007(平成19)年8月30日記